Case Study
支部ケース・スタディ
南関東支部

行政、高校、CATV局の3者共同で制作する番組『これって何ずら ふじよしだ』

(株)CATV富士五湖

放送部
武藤 卓也

市の事業を「わかりやすく」伝えるために

(株)CATV富士五湖は、山梨県富士吉田市全域をサービスエリアとしています。エリアとなる富士吉田市では、年間を通じてさまざまな事業を展開していますが、その周知・広報の多くは、市のウェブページや毎月発行の広報誌、CATV富士五湖のコミュニティチャンネルでの告知でした。どの情報も大人目線での原稿のため、いわゆる「お堅い」文章でした。

また、なかには、住民にとって大切な事業なのに意外と知られていない、便利な施設なのに利用方法がわからないなど、住民が「わからない」という事業がありました。

これまでも富士吉田市の事業を紹介する番組やお知らせを制作・放送していましたが、どうしたらもっとわかりやすく伝えられるのか考え、根本的な内容をもっと「やわらかく」「わかりやすい」をテーマにした番組制作を企画しました。

まず考えたのが、ナビゲーターです。わかりやすくといっても、大人対大人では、結果として堅い内容になってしまいます。そこで市内の高校に通う高校生をナビゲーターとして、高校生目線のわかりやすく、親しみやすい番組を制作することとしました。

もうひとつ高校生をナビゲーターとする理由に、「若い世代に地元の魅力を知ってほしい」ということがあります。

富士吉田市の事業や施設を取材する中で、地元の魅力を感じ、県外の大学に進学しても、卒業後は地元に帰ってきたいと思ってもらえればと考えました。

そして発信は、市内の98%以上が加入しているCATV富士五湖のコミュニティチャンネルとし、多くの市民にわかりやすく「富士吉田市の事業」を発信することとしました。

こうして、3者での共同制作がスタートしました。

番組は1本5分、毎月1本を制作し、番組タイトルは『これって何ずら？ふじよしだ』に決まりました。

「何ずら？」というのは、富士吉田市の方言で「何だろう？」という意味です。より住民に親しみをもってもらおうと、あえて方言をいれたタイトルとしました。

番組タイトル『これって何ずら?ふじよしだ』

県立吉田高校の放送部が活躍

ナビゲーターは全国大会や放送コンテストで入選実績のある山梨県立吉田高校の放送部に依頼し、部員たちが調査、インタビュー、ナレーションまでを行います。

番組は、高校生たちが広報誌を見て「気になった事業」を取り上げ、富士吉田市が関係部署や施設への連絡・

調整、CATV富士五湖は撮影・編集と、3者が共同でひとつの番組を制作します。3者共同制作はCATV富士五湖でも初めての試みの番組でした。

そして2016年10月、第1回目のテーマが「富士吉田市定住促進奨励金制度」に決まり、取材が始まりました。この「定住促進奨励金制度」は、新婚家庭等への経済的負担を軽減させ、市内への定住を促進する制度です。

「そもそも定住促進とは…」「誰が対象なんですか…」「どこに行けばいいんですか…」など、聞き手が高校生ということもあり、答える側の担当者も伝わりやすくするため、内容を柔らかくし、言葉遣いにも気をつけました。

高校生にとっては、今はまだ関係ない事業もたくさんありますが、高校生目線の「素朴な疑問」が番組をわかりやすくさせ、さらに素直な感想が好評を得ました。

山梨県立吉田高校の放送部の部員たちが調査、インタビュー、ナレーションと大活躍

2回目以降も、富士山噴火などの防災関係から子育て支援、上下水道、学校給食など、これまで広報誌で周知してきた内容を、高校生がリポート形式で毎月紹介していきました。

吉田高校放送部にとっても貴重な機会となる番組取材ですので、ナビゲーターもローテーションで務め、毎回新鮮な番組づくりを行っていきました。

しかし、大変なこともあります。

撮影は基本的に部活動の時間。限られた時間の中での撮影、さらに放送部もコンクールやテスト期間など、撮影の出来ない時期もあり、行政の担当者、高校生、CATVと3者の時間を合わせるのは毎回、ギリギリまで調整していました。

現場では、わかりやすく伝えるためにお互いが意見を出し、原稿の修正をするなど、本当の意味で3者共同制作となりました。

撮影も慣れてくると、1度に2本分撮影したり、給食センターでは実際に給食を食べたり、配水場では、施設のリポートをしたりと、撮影場所も毎回現地を訪れるなど、回を重ねるごとに内容も充実していきました。

撮影後は、編集作業です。1本を5分程度と決めているので、よりわかりやすくまとめたり、テロップを挿入したりと、毎回、富士吉田市の広報担当者を交えて編集をしています。

行政、高校、CATV局の3者共同で制作する番組『これって何ずら ふじよしだ』

(株)CATV富士五湖

ナビゲーターの高校生と富士吉田市長が対談

番組も軌道に乗ってきた2017年12月、番組のナビゲーターを務める高校生と、富士吉田市長との対談が実現しました。

毎回番組を必ず視聴している富士吉田市長も、この番組は「私の自慢」と話しています。

高校生との対談では「皆さんが作ってくれたこの番組はとてもわかりやすいと、大変好評なんですよ。市役所の業務にあまり関心を持たない若い世代に同世代である皆さんの自然なリアクションや高校生らしい姿が、共感を呼び、興味を持つきっかけになってくれたのです。市ではさまざまな業務を行っていますが、職員が内容を紹介しても、印象に残りづらい。また、若い世代だけでなく、高齢者の方など多くの皆さんが番組に興味を持ち、行政に耳を傾けていただいたことは大きな功績だと感じています。そういう意味でも吉田高校放送部の皆さんには本当に感謝しています」と話します。

また高校生も「番組を作りながら、市役所を身近に感じることができました。CATVの撮影風景、市役所の業務風景など、高校とは違う社会を見ることができ、よりリアルに将来のビジョンが見えるようになりました。初めはどうすればいいかわからず、アナウンスするだけならプロの方がいいのではないかといった葛藤もありました。しかし、市役所の方とコミュニケーションを重ねていくうちに自分たちの役割が見えてきました。高校生の目線で切り込み、声や映像で伝え、文字で伝えることにより、3つの要素が融合して、とてもわかりやすい番組になったのだと思います」と1年間の感想を話しました。

この対談は、広報誌に2ページにわたり掲載され、富士吉田市としても番組への期待度の高さがうかがえました。

3者協力3年目に突入、さらなる発信へ

今はナビゲーターも代替わりをして、2代目となりました。

毎月、番組を制作してきた成果が実を結び、先日供用開始となった「富士吉田・西桂スマートインターチェンジ」を扱った回では、開通式に同席し、山梨県知事や富士吉田市長にインタビューをする機会もありました。

放送局としては、ごく普通の現場かもしれませんが、高校生の部活動では経験できないことを経験し、生徒たちにとっても思い出に残る日となったようです。

この番組に携わり卒業した生徒たちは、「市民のみなさんと行政との架け橋になれればと思い活動してきた…」「この番組に携わり、ふるさとの魅力が改めてわかった…」「大学卒業後は、地元に戻ってきたい。大好きな富士吉田市のことを伝えられたのは自分の誇りです…」と番組制作を通じて地域の魅力を感じ、大学進学と同時に地元を離れるのが寂しいとも話していました。

ナビゲーター高校生と市長との対談が、市の広報誌に掲載された

番組ももうすぐ3年目に突入します。まだまだ伝えられていない富士吉田市の魅力や事業がたくさんありますので、これからも行政、高校生、CATVの3者が協力して、富士吉田市に住んでいて良かったと感じてもらえるような番組を地域住民に発信していきます。